

共同利用・共同研究課題「チベット・ヒマラヤ牧畜文化論の構築—民俗語彙の体系的比較にもとづいて—」(2021年度第4回研究会)

2022年3月28日(月曜日)13時より19時、ハイブリッド開催

本共同研究課題の第4回目となる研究会では、3件の発表と、発表に関する質疑応答・情報提供、今後の共同研究の活動に関する全体討論を行った。当日のプログラムは以下のようである。

発表1

山口哲由(AA研共同研究員, 京都大学)「中国語資料に基づくチベット圏内の乳製品の分布に関する考察」

質疑応答・情報提供

発表2

岩田啓介(AA研共同研究員, 筑波大学)「清代チベット・モンゴル間の門戸としてのナクチュ：特に牧畜に着目して」

質疑応答・情報提供

発表3

小野田俊蔵(AA研共同研究員, 佛教大学)「チベットの諺と牧民の生活感」

質疑応答・情報提供

全体討論

山口発表では、現地調査が行えず、中国に関しては各地域の民俗的、在来的な技術に関する資料収集が難しい状況において、1950-1960年代に行われ、1980年代に出版された『社会歴史調査』や1990年代以降に出版された各地域の『県誌』の記述をデータベース入力資料としてどのように利用できるのかについて、乳製品の加工に関する記述を例に述べられた。時代や執筆者のバイアスがかかっているなどの注意すべき点はあるものの、これらの資料はある程度利用可能であるという展望が示された。質疑では、乳製品の名称の漢語表記とチベット語表記の突き合わせの必要性や、日本語での訳語の統一が指摘された。また、『社会歴史調査』や『県誌』の執筆者の他の著作を参照することで、より詳細な情報が得られる可能性についても意見が出た。

岩田発表では、漢語、チベット語文献の精査によって明らかになった、チベット・モンゴル間の往来の中継地点としてのナクチュという場所についての役割について述べられた。

これらの文献からは、ナクチュがチベット・モンゴル間の往来を支える家畜の放牧拠点として重要な役割を果たしており、往来する使者らに家畜と物資を供給していたということがわかった。また、この交易拠点としての位置づけが、ナクチュにおける乳加工の特殊性に影響しているのではないかという点も示唆された。質疑では、「熬茶」とはどのようなものかという確認や、チベットにおけるラクダの用途についての質問の他、ナクチュの乳加工の事例についての情報提供があった。

小野田発表では、チベット語のことわざのうち、犬、馬に関するものの整理・分析が行われた。犬については獅子や馬などとの対比もみられ、「卑しい」、「汚らしい」、「価値が低い」、「無能」、「頭が悪い」といったネガティブな評価づけがなされている。一方、馬については、乗用が主な用途であるため、食用や乳用としての登場は少なく、脚力に価値がおかれていることがわかった。質疑においては、偶蹄類は食用とし、馬や犬といった奇蹄類は食用としないというチベット人の説明について、他の地域における同様の事例の報告が参加者よりあった。また、馬に関することわざのモンゴルからの影響について質疑がなされ、たとえだけの構成で記録されていることわざについての指摘がされた。

全体討論では、当日の議論の総括を行い、意見交換をした後、次年度の計画を話し合った。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.